

こっそりプチリニューアル!

「〇〇し合う」人や動きを紹介する地域福祉マガジン

グッチョ

G u c c h o

vol.21



TOPIC

誰かが信じて
始まる一歩

-another contents-
【シリーズ】“合う”という関わり 6

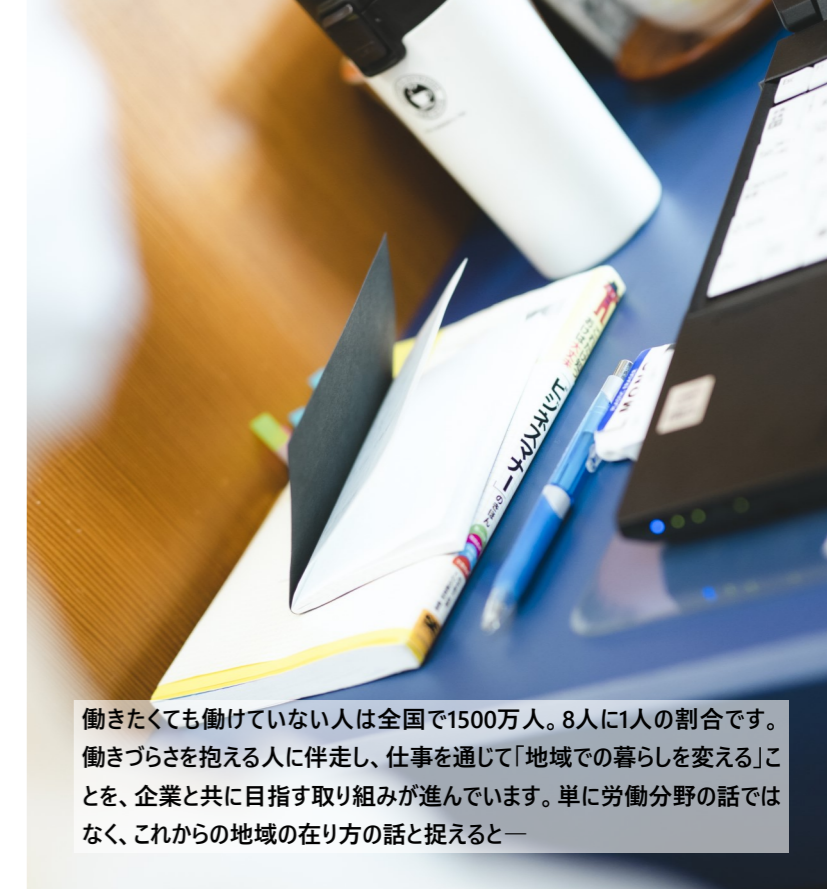


佐藤さんは女性、特に母子家庭の貧困を解決したいという思いで同法人や人材派遣会社を興しました。現在約7,000人が登録しているものの、マッチングまでたどり着くのは1割程度。「誰かが取り残されるような地域はきっと先細る。そうなると産業も廃れる。これからの地域や福祉のあり方を企業も一緒に考えるきっかけに」。同プロジェクトへの思いです

TOPIC

誰かが信じて 始まる一歩

【育成型就労プロジェクト】



働きたくても働けていない人は全国で1500万人。8人に1人の割合です。働きづらさを抱える人に伴走し、仕事を通じて「地域での暮らしを変える」ことを、企業と共に目指す取り組みが進んでいます。単に労働分野の話ではなく、これからの地域の在り方の話と捉えとー

を見せたら『こりやかなかなかやな』と苦笑いしつつ『分かった。一から教え込もう』とくずくずしてくれました。

置かれた環境が原因で、十分に成長や発達の機会が得られない。佐藤さんはこう話します。「貧困世帯の子どもにも同じ構図が見られます。生活保護を受けている家の子は、就職したら保護費が減るから家を出ないといけない。でも月10万円ほどの収入で一人暮らしは厳しい。そこに悪い誘いが来たらつい乗ってしまう。そうすると、あつという間に負の循環です」。

解決を急ぐだけが正解じゃない

12月上旬、同法人の事務所女性研修を受けていました。上田さん(仮名)は大学卒業後の1年間、就職活動はことごとく失敗。担当の久保花奈子さんは「彼女の慎重で真面目な面は違った印象を持たれがち」と分析します。上田さん自身も「話すのがとても苦手です。考えながら話そうとすると言葉が出てこない。なのに疑問を感じたら、つい相手の話を遮って質問しちゃうんです」。

上田さんは運転免許を持っていません。久保さんは、自転車で行ける範囲を地図に書き、手あたり次第に事業所を探しました。「パソコン技術は高く、介護初任者研修の受講経験があったので、それを生かせれば」と。11月に受けた面接で「社内外のコミュ



就職の一週間前。職場の雰囲気に慣れるために、同社で体験就労に励む上田さん(左)。久保さんが横で見守ります



上田さん用に久保さんが作った研修資料「社会人と学生の違い」。人間関係や責任などの認識の違いをまとめました

「Work Magic ダイバーシティ育成型就労プロジェクト」は、特定非営利活動法人「わたしと僕の夢」が取り組む事業です。働きづらさを感じている人をサポートしつつ、企業にもアプローチ。その人に合わせた雇い方や仕事の切り出し方など「働く」在り方について対話・提案し、賛同企業を募ります。同法人代表の佐藤有理子さんは「誰も取り残されない地域にしたい。地域福祉に足りないピースは企業。でも、とても重要な地域資源です」と話します。

「圧倒的な不足」という障壁

「一生懸命やっているのに、なかなか採用されない人は多い。子育て、病気、介護、外国人、年齢。あらゆるものが障壁になりがちです。少しの工夫やサポートでクリアできるのに。その『あと一歩』を地域全体で手助けする時代だと思います」。

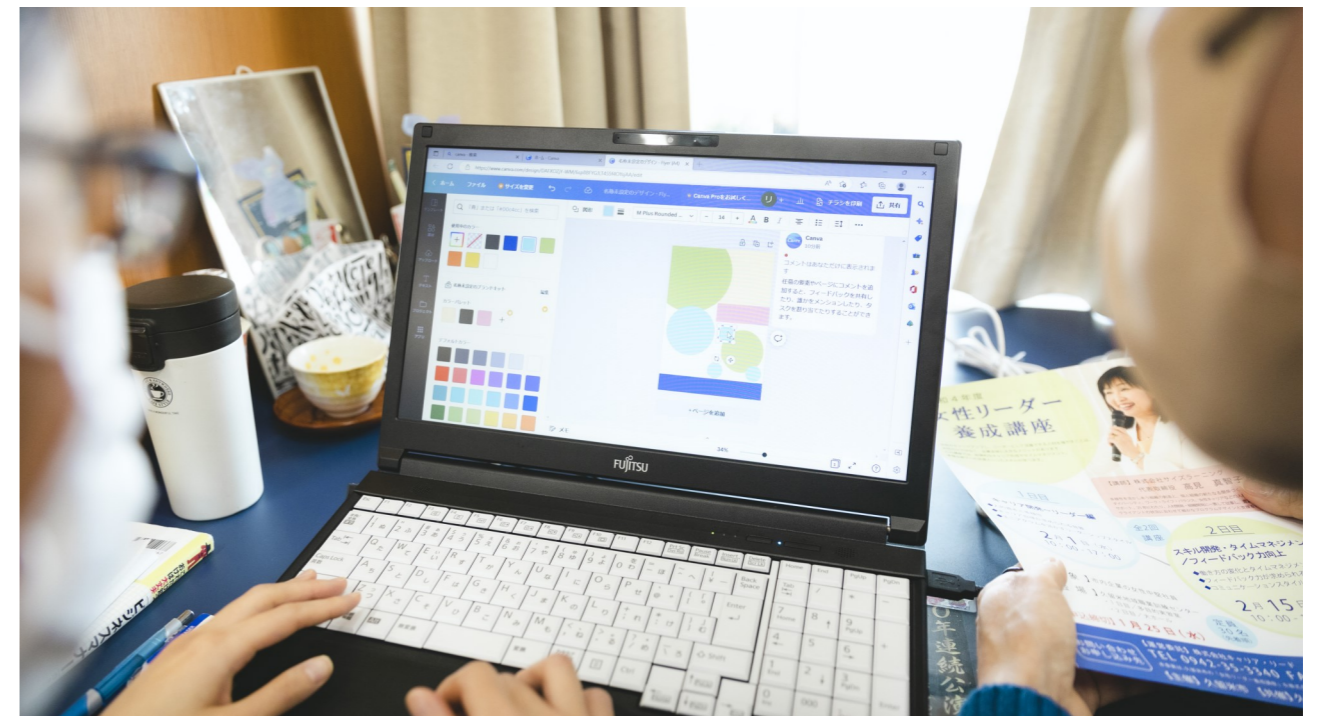
佐藤さんは多くの人と面談する中で「圧倒的な不足」という障壁を感じています。「最近のケースは、妻と幼い子どもがいる20代の男性で職歴がほぼ無く、運転免許は失効。そんな切羽詰まった現状をよそに、面談ではくわえタバコで立膝ついて『チーッス』みたいな。私の方が勉強の時間でした(笑)」。背景にあるのは経験の圧倒的不足。これまで関わる人が少なかったのです。う。「協力企業の社長にそのやり取りの動画



「さあ、やってみよう！」と研修を盛り上げる久保さん(左)。この日は仕事における時間や目標の捉え方、応対などがテーマ。代表の佐藤さんは「人材派遣業で培ったノウハウを生かしたい」と考えています



1月中旬の金曜日。上田さんは、待ち合わせの10時前に事業所へ。硬い表情で説明を受け、与えられたPC入力作業を開始しました。2時間の勤務初日が終わると緊張から解放されて晴れやかに。「パソコンでの作業は集中してできるので、向いているかもしれません。もっと早く作業が進むように自分なりに工夫してみたいと思います」と意気込みを話していました



WEBアプリを駆使してチラシを作る上田さん。「そんなことできるの?」と久保さんも興味津々

ニケーションを学んでくれたら」と、責任者の前向きな返事を受け、冒頭の研修に至ったのです。「彼女はとても積極的。長い目で見てくれる企業と出会えれば大丈夫だと思いました。この度、事務補助の育成採用にこぎつきました。また一歩前進です」。

伴走役として久保さんは、短期に解決する道筋を追うことだけが正解ではないと考えています。「現状を悲観するのは簡単だけど、私は一緒に希望を持ちたいから」。

時給750円のバイトが原点

同プロジェクトは佐藤さんの起業時から20年越しの想い。「起業のきっかけは時給750円の事務のアルバイトでした。志望者は多く、事務経験がなかった私は半ば諦めていました。ところが、なぜか採用されたんです。入社後上司が、採用理由を『あなたに暗さを感じて、暮らしを心配した』と話してくれました。その頃は確かに苦しかった。会社が私にチャンスくれたらと思っていました。この事業の原点です」。

.....

佐藤さんはこの取り組みで人と企業の「底力」を引き出せると信じます。「誰かが信じないと力を出せない人は多いんです」。損得だけではなく、踏み出す勇気を後押しできる。地域で共に暮らす人と企業の新たな関係創りが進みます。(担当・フトシ)



同プロジェクトの窓口は、代表の佐藤さんが経営する人材派遣会社の事務所と共同



書類の発送も体験。「上田さんは帰り際、作業が終わっていないのをすごく気にしていましたよ」と久保さん



ロマンを語る場では「本音の大切さ」を実証。多くの人が立場を超え、一歩踏み込んだ関係性を築きました



アウ
“AU”の視点で人との関わりを考える

久留米市は令和2年から「支え合いを文化として根付かせるために」と、いろんな人の対話の場を開催してきました。その中で気づいたことの一つに「知識より意識」「課題より可能性」「解決より関係性」があります。困り事を抱えた人に、より多くの人に関わるために大切な視点です。

福祉の専門家は「知識」を持って「課題」の「解決」を目指して関わります。では、専門家に任せておけば良いのか。地域で暮らしていくには、友人や知人、隣人など、より多くの人との“支え合い”という関わりが欠かせません。

三つのフレーズに込めた意味を3回のシリーズ記事で解説。市の委託事業で、多くの人に関わり合える手法“叶え合う支援”を模索するメンバーが執筆します。実際の出来事や専門家との対談などを通して、“AU(合う)”視点の大切さを訴えます。

【第1回】解決より関係性

彼の変化のきっかけは

K君(20)は母親と弟と3人暮らし。野球部主将だった中学時代、感染症の治療の過程で突然全身に激痛が走り、学校に行けなくなった。意志に反して体が動かなくなり、意思の疎通も困難に。夜間に一人外出しては動けなくなり、警察に保護されることもあった—

第1回は、ある家族との関わりから見えた「関係性」の大切さを描く。



母親は日々の生活に不安を感じ始めた。「その症状は薬の副作用の可能性もある」と医療的な助言を受け、減薬を試みるも改善しない。時には「救急車を呼んで」と苦しみを訴える息子を助けたい一心で全国の病院を渡り歩き、長い間苦悩の日々を過ごした。7年前、シングルマザーの会に何かを感じ、参加した。後の「じじっか」との出会いだった。

【じじっかメンバーの出会い】
血縁を越えた居場所である「じじっか」とつながり、母親は悩みを打ち明けるようになった。現代医療で支援する人はたくさんいたが、その方針と母親の意見が対立することも。K君が一人で外出した先で動けなくなるとじじっかメンバーが迎えに行き、夜通し行動を見守る日々が続いた。

しかし、この頃から彼は少しずつ心を開き人を受け入れ始めた。それは、支援者や友人などの間に立場を越えた関係性が生まれ始めたのと同じ時期だった。

【本人の意思はどこにあるのか】
K君には「誰かのサポートはいらない。自分の意志で生きる」という思いが根底にある。だから気が向かない所では絶対に車から降りないし、大好きなT S U T A Y Aではすぐに降りる。

「昨年、一人暮らしをした」と希望を漏らした。そこで福祉事業所 Find & Aet の榎原さんに協力を求め、家族と離れて暮らすことになった。同所やじじっかに宿泊場所を設け、あかり訪問看護ステーション久留米や自立訓練(生活訓練)フレアの職員など関わる全員でチームとなり、細かな情報もLINEで日常的に共有。寝ない・食べない原因を分析し、彼の気持ちを探し続けた。ある日、残した食事を下げようとする「友達のために取ってるんだ」と言った。翌年に開かれる成人式の案内が届いて以降、友達に会うのを楽しみにしているという「本人の意思」がつかめた。何度となく一人で外出し、卒業した中学校に行っていたのはそのためだった。

【意思や変化を感じ取る関係性】
「人の行動には理由がある。変化もあるし、一定ではない。私たちが安心感になれたらと思う」と榎原さん。さまざまな人が、K君の意思を感じ、変化に向き合いながら、立場を超えてK君の暮らしと共に歩む。本来特別なことではない。課題解決を急ぎすぎると、本人の思いが置いてけぼりになることがある。関係性を深めながら、できることを探すことの大切さを知った。



「世の中すべて敵と思っていた時もあった。でも今は私が死んでも、誰かがKを守ってくれる気がする」と母親は本音を打ち明けた。成人式後に撮った友人や事業所スタッフとの一枚



中学校時代の野球部の監督とも再会。やりたいことを聞かれたK君は熟考し「音楽がやりたいです」と返答。帰りには「あったー！」と野球部仕込みの挨拶で見送っていた



支援事業所やじじっかメンバーが開催した鍋会で、遠方で暮らす友人とテレビ電話を接続。久しぶりに会いたかった友人との再会をきっかけに状態は少しずつ変化していった



夜間に外出して警察に保護されるのを防ぐために、じじっかやFind&Aetのメンバーと一緒に道を歩く。道の真ん中でフリーズしたり、数時間にわたって止まることもあったと言う

\地域福祉マガジン/



久留米市
健康福祉部地域福祉課
〒830-8520
久留米市城南町15-3
☎0942-30-9175
Fax0942-30-9752